

第1回 森林環境教育・木育のあり方検討会 議事概要

日時：令和2年3月23日（月） 13:30～16:20

場所：勤労者福祉会館 6階 研修室

検討事項

- (1) 三重県における森林環境教育・木育の現状と課題
- (2) LEAFについて

主な意見

- 林野庁や三重県が用いている「木育」という言葉の定義には、森林環境教育と比較して、森林とのつながりという観点が欠けているのではないかと。
- 何らかのビジョンを作ることによって、現在行われている取組の中に排除されたり、否定されたりするものが出てくることとならないようにしてほしい。
- LEAFは、ノルウェーで始まった森林環境教育プログラムであり、森林産業界が産業の普及啓発のために取り組み始めた消費者教育である。森林環境教育・木育を実施するに当たっては、子どものみならず、その親や教師へのアプローチも意識することが重要である。

LEAFでは、ステップに基づいてプログラムを組んでいるが、環境問題に自分なりの判断を下す、というステップがある。環境問題に自分なりの判断が下せるようになると、適正に管理された森林から伐採された木材や地元で伐採された木材を選択できるようになる。このような消費者が増えることが、森林・林業関係者が、森林環境教育に取り組む意義となる。

- 特定の教育プログラムをそのまま三重県に導入するだけでは、十分根付いていかない。三重県という地域の特徴や文化を大事にして、それに合うように、アレンジして取り入れることが大切である。
- ビジョンを策定するに当たり、作ったままということにならないよう、林業・木材産業、教育現場、一般の県民が、共に目指すところ、共有すべき内容、共有の仕方について、十分議論しておく必要があるのではないかと。単なる情報共有にとどまるのではなく、いかに、考え方を共有できるかが課題と考える。
- 教育と産業の共通価値の創造(CSV)が重要であり、この検討会の場にも、林業・木材産業の方にも同席してもらい、ビジョン策定の検討過程を共有することが大切ではないかと。また、策定後も、関係者との対話を通じて、ビジョンを育てていくことが重要ではないかと。

- 森林・林業に関心のない子どもも対象に含め森林環境教育・木育の裾野を広げていくためには、学校の活動の中にかか入っていくかが重要である。
 - 学校現場に余裕が乏しい中で、現在の取組に追加して森林環境教育・木育を実施することを求めていくのは、現実的ではないように思われる。普段の教科の中には森林に関するところがあり、そこをうまく活用し森林のことを伝える工夫を重ねることが重要ではないか。
 - 学習指導要領の学びを推進する材料・場として、森林をとらえることができれば、学校現場において自然に森林環境教育・木育を取り入れやすいと考える。
 - 学校教育では主体的な学びがより重視されるようになっており、県教委においても、高校に加え、中学校でもPBL（Project Based Learning）を推進する取組を始めようとしているところ。このような主体的な学びと、森林環境教育・木育は親和性があると考えられる。
 - 学校教育に取り入れていくためには、ビジョンのほか、教材を作っていくことも必要である。北欧のLEAFでは、様々な教科の中で森林が学びを深める材料として活用できるプログラムが出来ており、また実施されている。
 - 県内では、保育士の不足が深刻であり、待機児童も発生している現状がある。そのような状況の中で追加的な負担となると対応が難しいが、保育園や幼稚園によっては、それぞれ特色を出そうと模索しているところもあり、自然体験を打ち出している園もある。「子どもの健やかな育ち」という観点をうまく打ち出すことができれば、取組への理解が広まる可能性もある。
 - これまで木育に取り組んできたが、例えば、木のおもちゃで遊んでいる子どもの傍にいたる親に、どのようにアプローチするかが課題と考える。また、木育の場で、山側の情報をどのように伝えるかも課題があると考えている。
 - ここ最近、休日を過ごす空間として、森林公園等が選ばれるようになってきており、今まであまり見かけることのなかった中高生や家族連れも多く訪れるようになっていなど、新たな状況が生まれつつあることを意識しなければならない。
- 森林環境教育・木育をSDGsという世界共有言語で捉えなおす必要があり、そうすることが森林環境教育・木育を産業界と共有していくチャンスとなるのではないか。
- 学校現場での対応が難しいということであれば、公民館や児童館等地域（社会）における取組の可能性を模索することもできるのではないか。学校現場でも、地域とともに

ある学校への転換を図るためのしくみとしてコミュティスクールが動いているはずである。